
幸せ屋

ランタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ屋

【Nコード】

N8417A

【作者名】

ランタン

【あらすじ】

あなたの幸せは何ですか？私達幸せ屋がサポート致します。

プロローグ：夏祭りの夜店。

『あなたの幸せは何ですか？ 私達幸せ屋がサポート致します』

夏祭りの夜店の一角にあった看板。

最初は訳がわからなかったけど、100円でサポートしてくれるみたいだったから、私は迷わずその看板の向こうへ入った。
中には、一人の男がいて、私を見て、言った。

「おまえの幸せは何だ？」

私は自然と、100円玉を差し出していた。

第一話 本当の家族

「……それで？」

男は私をまっすぐ見て、言った。

「本当の家族に会いたい」

私は、家族……実の両親に会った事がない。
なぜか。

どうやら私は捨て子のようなのだ。
義理の家族……拾ってくれた人たちは、そんなこと一言も言わない
優しい人だけど、私はそう思う。
だって、なんだかよそよしいところがあるから。
私のひとりよがりだったら別にいいけれど、そうにもいけない。

「……100円は返す」

「へ？」

男は、さっきよりさらに眉間にしわをよせて、私を睨んだ。

「『本当の家族』だあ？ 笑わせんな。そんなわがまま通ると思っ
てんのか。ここは幸せをサポートする所だ。おまえがそれで幸せに
なれるとは到底思えないんだよ」

「でもっ……」

「慶。こいつ落ち着かせろ」

そして、『慶』と呼ばれた人が出てきた。

メガネかけた長髪の男の人だった。

「かしこまりました」

「！？」

いきなり手を引っ張られて、私は体のバランスを失う。

「……どうということ？」

「あなたの幸せを願って、当主はあのようなことをおっしゃったの

だと存じます。だから、あまり気を落とさずに」
「はあ……」

意味不明。

こんな店がなんで出店できたのかわからない。
100円玉は、まだキラキラ光ってる。

『本当の家族』なんて、所詮私の思い込みなの？

……いや、まだ諦めたくはない。
だって、まだ何も知らないもの。

私は、100円玉を握りしめて、ずんずん歩き出した。
耳の奥では、まだ男の声が響いていたけれど……

第二話 予感と不安

私には、常々思っていたことがいくつもある。例えば、『私はどうして、今ここにいられるのか』という漠然とした疑問、『もしかしたら、今ここにいられるのはすごく奇妙なことなのかもしれない』という勝手な思い込みなど。所詮薄っぺらい私の考え方だとそれで終わってしまう。でも、そんな月並みな考え方でも思いつくことはたくさんある。

その一つが、自分の家族についてだった。

けっして、家庭に問題があるわけではない。当たり前と言っては何だけど、本当にそういう感覚だったから、それを自分が考えた時に愕然とした。自分がどれだけ疑問を抱かずに、家族に依存していたかを知ってしまったから。

「だからって、今更」

そう、今頃になって気づいたのだから、仕方ないんだ——そう、自分を言い聞かせても、一度気づいてしまった自分の気の緩みはどうしようもなかった。気づいたら、もう離れられないくらい近付いている。ただ、自分がどうしてそこまで家族にこだわるのかはわからなかった。多分、先週の木曜日、十一時五十四分がなければ、ずっと気付かなかった。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

母さんと、それだけの挨拶。それで一日は終わるはずだった。

「あ。何か留守電あったから、掛け直しなさい」

でも、その日私には電話されるほどの思い当たる用件がなかった。思いを巡らせてもどうにもならないので、一旦留守電を聞いてみた。

後から思い返してみれば、あの時点で母さんは――あの人は、私との別れを決意していたのかもしれない。あの人の性格からして、留守電は真っ先に聞いていたはずだから。

『再生を始めます』

『もしもし、貴方、クレハ？ あ、ごめん今思い出したけど、もう連絡取るなって言われてたわ。ごめんなさいね。まあ、大した用件じゃないから後でも構わないんだけど、とりあえず掛け直してくれる？』

『再生が終わりました』

私は、すぐに掛け直した。
相手は出なかった。

第二話 予感と不安（後書き）

一年以上お待たせしました。すいませんでした。これからまたぼちぼち更新していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8417a/>

幸せ屋

2011年1月29日14時57分発行